

1241 RI Lymphographyによる子宮頸癌浸潤度診断  
藤田卓男, 赤松信雄, 福本 悟, 浮田信明,  
関場 香(岡大, 産婦) 田辺正忠(岡大, 放)

子宮頸癌の広がりを客観的画像として把握することは治療方針決定の上に極めて重要である。今回、子宮腔部局注RI Lymphographyを考案し、子宮頸癌の広がりの判定に応用した。〔対象〕子宮頸癌臨床進行期Ⅰ及びⅡ期の症例で、広汎子宮全摘及びリンパ節郭清術が施行された48例を対象とした。〔方法〕子宮腔部粘膜下に<sup>99m</sup>Tc 硫黄コロイドを局注し、コンピュータ管理下に2時間にわたって所属リンパ節へのTc流入の有無、流入速度及び集積率を算出した。結果は片側毎に組織学的所見並びに直腸診所見と比較検討された。

〔結果〕巨大花菜状癌2例は粘膜下注入できず失敗例として解析より除外した。組織学的検索の結果、リンパ節5側と子宮旁組織7側に腔を除く子宮外への癌の広がりを確認したが、残り80側では否定された。RI Lymphographyの有病正診率は90.9%であり、無病正診率は78.8%であった。直腸診では、それぞれ90.9%と57.5%であった。有病正診率では両者は等しく、無病正診率ではRI Lymphographyが明らかに良好であった。

〔結論〕我々の考案した子宮腔部局注法によるRI Lymphographyは子宮頸癌の広がりの診断に有用であることが判明した。

1242 各種悪性腫瘍患者における血清フェリチン値と血清鉄値の比の臨床的有用性について  
西野茂夫, 上北洋一, 菊池雄三, 浅野 章,  
広瀬仁一郎, 早坂和正, 西部茂美, 三橋英夫,  
天羽一夫(旭医大, 放)

血清フェリチン値は種々の疾患で上昇することが知られており、特に悪性腫瘍において、CEA・AFPとともに、tumor-markerとしての利用が臨床的に応用されつつある。

我々は250症例の未治療例の悪性腫瘍患者を対象とし、血清フェリチン値(Ft)と血清鉄値(Fe)の比(Ft/Fe)を用い、各種悪性腫瘍の病期、進行度、さらにFt, Fe, Ft/Fe間、相互の相関性について検討した。

子宮頸癌では、Ⅰ・Ⅱ期 $1.3 \pm 0.3$ 、Ⅲ期 $2.7 \pm 0.6$ 、Ⅳ期 $10.2 \pm 3.6$ と病期が進むに従い、比は有意に上昇した。食道、頭頸部、肺の各腫瘍についても同様に、早期例に比べ進行例で有意に上昇したが、その上昇の程度、相関性には、疾患により差異が認められた。

さらにFt/FeとCEAとの相関性についての検討も加えた。

1243 FerritinのTumor Markerとしての臨床的検討

大石正雄, 吉村正己(静岡県立中央病院, 放),  
越村 修(同科医長)

健常成人男女ならびに悪性腫瘍を含む各種疾患の血中Ferritin値を、現在国内で市販されている5種のKit(Riagnost, NEN, スバック, CIS, 科研)を用いて測定し比較検討した。

症例は健常成人男子26名, 女子46名, 胃癌10, 食道癌2, 大腸癌6, 卵巣癌6, 乳癌5, 膀胱3, 肝癌4, 肺癌4, 透析患者12, などであり、各kitにおける各疾患の検出率及び有用性について報告する。

結果は、Riagnostが一番高値を示す傾向があり、科研, CIS, NEN, スバックの順で低くなる。

Tumor Markerとして用いる場合には肝と胎盤、肝と脾Ferritinと云うような組合せでの測定が必要である。(CEA, AFPとのコンビネーション Assayを含めて)。

1244 肺疾患におけるフェリチン測定の意味について

真坂美智子, 吉見輝也(浜松医大, 二内)

現在、腫瘍マーカーとして最もよく用いられている検査はCEAや $\alpha$ -fetoproteinであるが、最近ではフェリチンもある種の悪性腫瘍で上昇することが報告されて以来、その臨床的意義について再検討されるようになった。一方、肺癌の早期発見のためのよい指標となる免疫学的測定法もいまだ見当たらないので、フェリチンのマーカーとしての意義について検討した。

肝フェリチン抗体を用いた測定系において、良性疾患と悪性疾患とを区別するcut off値を250 ng/mlとした場合、肺癌の陽性検出率は45.9%であった。結核サルコイドーシス、気管喘息などの疾患では、34例中3例が陽性に検出されたのみであった。又血中におけるフェリチンの多様性を考慮し、胎盤フェリチン抗体を用いた測定値と比較検討すると、良性疾患と悪性疾患ではやや異なった分布を呈しているようであった。その詳細について検討しているが、いずれの測定系においても、外因性carcinogenが深く関与するといわれている扁平上皮癌で極めて陽性率が高かったことは興味深い。更にCEA、カルチニンなどの関係についても言及したい。